

邂逅の回廊<sup>コリダ</sup>——田中志津・行明交響録 目次

第1楽章 随筆——田中行明

手紙	2
夢は夜ひらく	8
喫茶店	11
富士山	16
挑戦する画家たち	16
富士百景	20
姉の死と富士山	21
富士登頂	22
東京経済大学瑞艇部 水上運動会	29
新制作展	34
グループ展	37
東京オリンピック	39
野良猫	42
敬老の日に想う	45
西ドイツ	50
マールブルク(Marburg)	51
ライン川下り	54
ハイデルベルク(Heidelberg)	56
音楽会	60
教会でのミサ演奏	58
クラシックコンサート	59
ハンブルク(Hamburg)	60

フランクフルト (Frankfurt) ……63	マールブルク市内 ……66	夜のパーティー ……67	市内散策 ……73
策 ……69	学生酒場 ……70	さよならパーティー ……73	
出版記念パーティー ……81			
阿佐ヶ谷駅周辺 ……81			

第2楽章 短編小説——田中行明

地平線の彼方に明日は見えるか ……88				
1 放浪 ……88	2 学生百景 ……91	3 札束を数える女 ……99	4 派遣社員 ……135	
5 東奔西走 ……136	6 再会 ……149	7 祝宴 ……156	8 新たな旅立ち ……157	9 横浜港 ……162

第3楽章 田中志津短歌作品集(2013年 創作)——田中志津

佐渡 ……166
佐渡相川実科女学校(昭和7年から8年) ……168
佐渡おけさ祭り(昭和初期 佐渡相川) ……170
小千谷 ……171
中野にて ……171
白鷺 ……172
阿佐ヶ谷 ……177

第4楽章 随筆——田中志津

秩父 ……178
回想 ……178
妹死す ……179
出版祝 ……180

最近想うこと ……182				
原発事故を逃れて東京へ ……184				
自然の美しさ ……185	望郷 ……186	どんぐり山 ……187	指揮者 ……191	来らっせ ……192
ふるさと紀行 ……196				

小千谷 ……196	へぎそば ……197	角突き ……197	錦鯉 ……198	小千谷縮 ……199	平沢新田周辺の回想 ……201	成就院 ……202	「田中志津生誕之地」碑 ……203	佐渡島 ……205	再会 ……206	山本修巳先生と「佐渡郷土文化」 ……207	満天の夜空 ……212	母校などを訪ねる ……214	母校を訪ねて校長先生への書簡 ……215	石拓町周辺 ……217	相川高校 ……219	佐渡金山顕彰碑(文学碑) ……220	台風前夜 ……221	帰京 ……222	新潟女子工芸学校時代 ……223	想い出の海外旅行記 ……226
-----------	------------	-----------	----------	------------	-----------------	-----------	-------------------	-----------	----------	-----------------------	-------------	----------------	----------------------	-------------	------------	--------------------	------------	----------	------------------	-----------------

香港・マカオ ……226	台湾 ……228	韓国 ……230	
フィリピン ……232			
市内散策 ……233	朝のローソク ……234	女学生と母親 ……236	タクシーから見る車窓風景 ……236

タイ……237

チャオプラヤー川……238／パタヤビーチ……239

シンガポール……240／ハワイ……242／イタリア……247

フランス……249

「親子3人展」……250／ロタン美術館……252／ルーブル美術館……253／オルセー美術館……253／

市内観光……254／モンマルトル……255

スイス……257

ジュネーブ市内・旧市街……258／レマン湖……260／シャモニー・モンブラン……261

新宿回想……264

## プロフィール／写真

プロフィール 田中志津 ……268

プロフィール 田中行明 ……269

写真 ……270

あとがき ……274

## 手紙

世界で一番短い手紙とは、差出人が「？」の「？」記号。それに対して受取人の返事は「！」の「！」記号。若い頃、人から聞いた外国の話である。何ともシンプルで洒落の分かる粋な交友関係なのであろう。「いかが？」「素晴らしいよ！」とでも解釈すれば充分だろう。

百の言葉よりひとつの記号が優位性を示す。記号論理学？ではないが……。

人の言動にはあまりにも蛇足が多い。自己表現や自己防衛の為に、機関銃のように説明を繰り返す。言葉を多く発するたびに矛盾も生まれ、その結果墓穴を掘ることを忘れてはならない。「沈黙は金」という言葉を思い出した方がよい。時には相手に勝手に想像させるエアポケットも必要なのだ。世の中、雄弁が勝るとは限らない。

現代では若者を中心に、絵文字や記号が携帯メールなどでよく使われている。確かに言葉よりも笑顔の絵文字とか、泣いている顔や怒っている表情など喜怒哀楽の表現ができる。その時の自分の気持ちを端的に表現できる効果もあるようだ。だが、何か物足りなさを感じるのは私一人だけだろうか？

いにしえより、我が国では『源氏物語』などで多くの「恋文」が登場する。恋文に寄せる想いは古今東西、ことのほか、熱くて深いものがある。

私が初めて恋文を書いたのは、大学を卒業した22歳の若かりし頃だったろうか？同じ法人に勤務する5〜6歳年上の人Sさんだった。課は違ったが、同じフロアで働くその人の仕事ぶりや、言動に心が揺さぶられた。彼女の周りがいつも輝いて見えた。これが恋なのだろうか？

彼女は大手商社から転職して、私より数年前に勤務していた。長い髪をアップにして頭の上に束ね、キャリアを積んだ仕事のできる女性だった。私は勤務中でも彼女に熱い視線を投げかけていた。女は、男の熱い視線を本能的に察知する生き物のようである。そうしているうちに、嬉しいことに私を少し意識してくれ始めたものの、彼女には、当初から年下の男は対象外だったようだ。夏を過ぎた頃であろうか、一向に振り向かない彼女に、私は思いの丈を一束の恋文にまとめて、昼休みに給仕場で彼女に手渡した。私は後で読んでくださいと気持ちの昂ぶりを抑えながら、茶封筒に入れた分厚い恋文を渡すのがやっとだった。彼女は、戸惑いながらも受け取ってくれた。受け取ってくれたというよりは、受け取らざるを得なかったのかもしれない。

40年前以上経っているのに、おぼろげであるが、表紙は確か画用紙にクレパスと絵具で、力強いタッチの抽象画を描き「現代恋文綴り帳」などと書き、便箋五〜六枚に穴をあけ、閉じ紐で閉じていたような気がする。クレパスの匂いだけは、今でも鼻について残っている。

その恋文には、あなたに寄せる恋のときめきが抑えられないほどに強く、やるせない？そこまでは書かずとも、是非私とお付き合いをして欲しい。私は決して今のままでは終わらない。ビッグになる。きつとあなたを幸せにする自信があるなんてことを真剣に書いていたような気がする。若さなのだろうか。彼女に対する決意表明でもあり、思いは一直線で微塵にも迷いはなかった。

その後、彼女からは待てど暮らせど返事は来なかった。それは彼女の大人の対応だったのかしらん？それでも